



0歳からの教育

楽で楽しい子育てのために

第三話

各発達段階には発達課題がある

課題をクリアしない飛び級はない

幼児教育研究者の成果の紹介 エリクソン

今回から、研究者の中から代表的な人の発見をたどりたいと思います。その中で、私なりの解釈を付け加えていきたいと思います。

エリクソン（米国） 乳児期の「基本的信頼関係」確立の重要性を主張、ライフサイクルモデルの構築

人間の成長を8段階に分けて考え、それぞれのライフサイクルを健康に幸福に生きていくためにはそれぞれの段階で、解決しなくてはいけない発達課題（CRISIS）があると説きました。一つの発達課題をクリアしないと、次の段階にいけないとしました。そこで、私の関心は、乳児期の「基本的信頼関係」が上手く構築できないと、何故、次の幼児期の課題の「自律性」が確保できないのかという疑問です。

エリクソンの発達段階

- ① 乳児期（0歳～2歳 幼児前期 発達課題は「基本的信頼関係」の獲得）
- ② 幼児期（2歳～4歳 「自律性」を身につける）
- ③ 児童期（4歳～7歳 「自主性」を育む）
- ④ 学童期（7歳～12歳 「勤勉性」）
- ⑤ 思春期・青年期（13歳～22歳 「アイデンティティ」の形成）
- ⑥ 成人（23歳～35歳 「親密性」）
- ⑦ 壮年期（36歳～55歳 「世代性」）
- ⑧ 老年期（56歳～「人生の統合」）

人生の初期（乳児期）の発達課題は「基本的信頼関係」の確立である
子どもが望んでいるように愛してあげた結果が、子どもが母親を始めとする周囲の人を信じ、自尊心と、自信が生まれ、意欲や感情が育っていく「母は子どもにとって人類とかわる最初の扉である」、「母親が赤ちゃんといることが楽しい（赤ちゃんが母に与えている価値）、と思えば赤ちゃんも母親と居ることが楽しい（母親が赤ちゃんに与えている価値）と感じる」、「これが基本的信頼関係（愛着）形成の始まりだ」と述べています。

「人は人（赤ちゃんの時は母親か祖母等）を信じることでしか、自分を信じる事が出来ない。信じる事ができる人を持つことが、自分を信じる事の絶対条件である」とも述べています。

人生の初期（乳児期）に子どもが望んでいるように愛してあげた結果が、子どもが、母親を始めとする周囲の人を信じ、自尊心と、自信が生まれ、意欲や感情が育って行く。

「エリクソンは、人間の発達や成熟には一定のステップ・アンド・ステップがあると言っています。そして、そこにはとび級はないと言っています」（佐々木正美書『あなたは人生に感謝できますか』より引用）。

乳児期の「基本的信頼関係」が構築されないと、何故、「幼児期の発達課題の自律」が上手く行かないのか。皆様と考えてみたいと思います。

今回は乳児期の、「基本的信頼」についての紹介ですが、幼児期になると「自律」が発達課題となってきます。しかし、「基本的信頼」が十分に形成されなければ、「自律」もうまくいかないのです。「自律」とはセルフ・コントロールの事です。脳科学的に表現するならば、「自己制御力」です。目標達成のために自分の行動をコントロールする能力は最も重要な脳の基本機能です。将来、勉強だけでなく、人間関係等を築くのにも重要です。自己制御力が発達するためには、脳がある程度成熟している必要があります。

- 乳児期に、母親から十分なスキンシップを受けたり、インタラクティブ（社会的相互作用）な対応を受けると赤ちゃんは満足して、ドーパミン等の脳内ホルモンを分泌します。これが A10ニューロン（神経細胞）を成長させ、A10ニューロン脳幹の先から伸び、脳の前頭葉に向かって張り巡らされるのです。この A10ニューロンの先から又大量のドーパミンが出て、特に、前頭前野を発達させるのです。前頭前野には思考を含む、「実行機能」を司っています。

A-10 ニューロン (神経細胞) とドーパミン

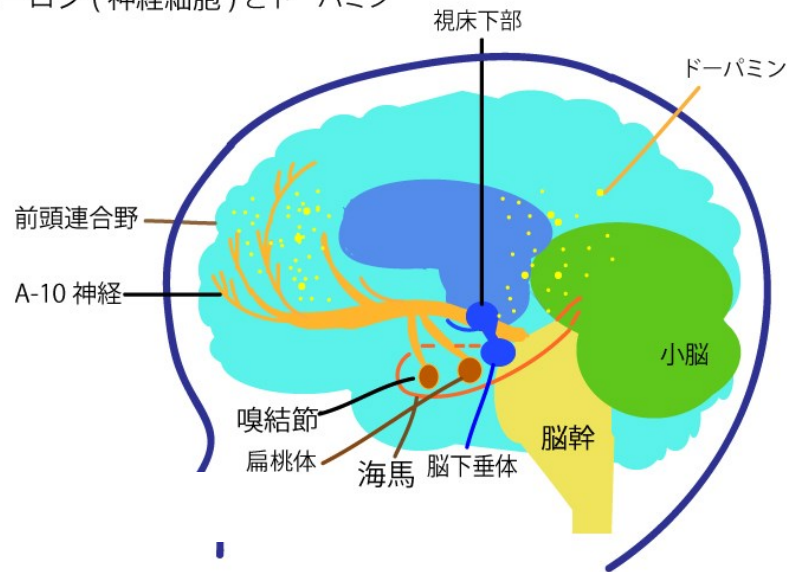


図 2

- 母親と赤ちゃんが、同じ動作や表情をして、同期してインタラクティブな作用を行うことは、子どもの認知力を高め、自己制御力を身に着けるためのスタートなのです。赤ちゃんが出す様々な合図（おっぱいが欲しいとか、かまって欲しいとか、うれしいとか）、を慎重に観察して、それに応えてあげたり、お母さんが、子どもの喜ぶことを働きかけてあげれば、脳の中の様々な皮質を刺激して、それらの領域をより上手に脳の「実行機能」の中で統合して、自己制御しながら、行動できる様になるのです。
- 先日フィンランドでセラプレイ（別の機会に説明します）の学会がありました。出席した人から資料を見せてもらいましたが、発表の中に、still face（静止した顔）という実験がありました。赤ちゃんをあやしていた母親が突然無表情になるのです。赤ちゃんは何とかコミュニケーションを取ろうとして、母親に笑ってみたり、何かを指さしてみたり試みますが、それが駄目だと分かると激しく泣き始めます。赤ちゃんにとって、母親との相互作用はとても大切なことなのです。ストレスを感じて、さぞかしこの時赤ちゃんにストレスホルモンであるコルチゾールが増加したのではないかと思います。
- ストレスについて少し整理したいと思います。赤ちゃんが母親の胎内にいるときに母親のストレスから受ける（体液を通した）影響、また、赤ちゃんの時感じたストレスから受ける影響は大きいのです。人は身体的脅威にうまく反応できるようにストレス対応の仕組みを作りだしました。
- 先ず、捕食者等の脅威に効果的に対応するために、一秒以内に交感神経系はエピネフリンとノルエピネフリンを出します。これは、筋肉にエネルギーを送り、心臓の血液循環能力を高め、現在起きていることに不必要なシステムを遮断します。第一弾の危機対応です。数分後に視床下部・下垂体・副腎皮質系が働き始めるのです。副腎皮質は血液中にコルチゾールを放出します。コルチゾールも覚醒と警戒を促し、眼の前の問題解決するためのエネルギーがほかの事に使われないように、成長や修復、生殖、

消化等の外のプロセスを抑制します。これが第二弾の危機対応です。

- これらは短期決戦用の危機対応システムです。縄文時代までは、人の遭遇する危機は熊に襲われる等、短期決戦でした。ところが現代ではストレスは長期に及ぶのです。コルチゾールのレベルが高いままだと、高血圧、免疫機能障害、骨粗しょう症、糖尿病、心臓病になりかねないのです。ご主人が、会社でストレスを受け、帰ってから家庭でストレスを受け続ける状況ならば、リスクは高いのです。
- コルチゾールに長時間さらされると、脳障害も引き起こします。(『0歳からの子育て』 サンドラ・アーモット、サム・ワン著より一部抜粋) 母の胎内にいたときに母がコルチゾールを多量に分泌する状態にあった場合や虐待された赤ちゃん、抑鬱感を積み重ねた乳児には脳の変形も見られるのです。また、ストレスを感じやすい体質にもなり、将来の社会生活がやり辛くなる性格が形成されます。ある生命保険会社の調査では、このような子どもは、早死にする確率も高いそうです。反社会的行為、危険な行為をするからです。
- 母親との関係性が良好ならば、乳児の脳も発達し、母とのインタラクティブなかかわりが増え、ワーキングメモリーを中心とする脳の「実行機能」をトレーニングすることになり、発達を促します。「実行機能」中心は、自己制御力です。何かの目的のために筋肉を動かすことは、自己制御力を必要とするのです。
- 躰は子育ての中でも大切なものです。この問題を狭義に考えるのではなく、子どもの自己制御力育成、親や社会との「価値観の共有」という観点から、広義に捉えるべきです。親との価値観の共有が出来れば、子育ては成功したようなものです。幼い時の、当面の身の振るまいから始まって、やがて、人としての生き方、考え方まで伝えるのです。子どもが親が象徴する、社会（学校なり、地域なり、国なり）に帰属したいという気持ちが、生き方、価値観の共有になるのです。
- 躰とは、親が、きつく、厳しく、怖く子どもを抑え込むことではなく、子どもが自ら「守らなくてはいけない」、「我慢しなくてはいけない」と願い、自己制御する能力の事です。親が、子どもが守るべきことをやさしく、何故守るのか、年齢に応じてやさしく何度も言い聞かせたり、ルールを作って守るべきことを分かり易くしてあげる必要はあるのですが、子どもが傷つく様な叱り方をしてはいけません。エリクソンは「いつ守れるか子どもに決めさせなさい」とまで言っています。
- 「何かをする」ということは、あることに関心を向けて、その事に集中し、筋肉を使ったり、言語などのコミュニケーション能力を使って、目的を実行することです。これは、自己制御力と前頭前野領域のワーキングメモリ等の「実行機能」相互作用が必要です。普段の母親との社会相互作用を通じて、少しずつ強化していくものなのです。大切なことは、「両親や家族」に子どもが「愛されている」と感じ、喜び等を共有できることです。「大好きな、信頼できるお母様が大切に思っていることは（躰けたいと思っていること）、きっと大切なことなのだ」、「ルールを守ってお母様に褒めて貰いたい」という気持ちが、守ろうとするモチベーションになるのです。この時、自己制御力が育っていると、自分の力でお約束を守れるのです。これが本当の意味での躰

です。個人差があり、何度も言い聞かせてあげなくてはなりません。

コラム

先日教室でこんなことがありました。

男の子が、教室でブランド物の持ち物を紛失しました。お母様は普段になく感情的になり、男の子を激しく叱責しました。男の子は黙ってそれを聞いていましたが、顔には非服従の色が見えました。その一部始終を見ていた先生は少し心配になりました。でも、そのお母様は普段は愛情を込めて接しているので大丈夫です。

気を付けなくてはいけないのは、普段から子どもと「共感」を重ねることなく、ただ、「きつく、怖く、厳しく」だけで躰ようとする、両親の前ではおとなしくても、幼稚園等の外で、両親の見ていないところで、逸脱行為をする場合があります。本人が、大好きなお母さんの言うことは、きっと自分のためだから、自分で「守ろう」と思うことが大切なのです。何故いけないか分かり易く説明することも大切です。親子面接考査では、母親に「何故か」を子どもに対して説明させて、普段の様子を窺うこともあります。

- 自分の属する家族との信頼関係を築けなかった場合は、その家族が大切に思っている本人の躰、価値感を共有できません。また、乳幼児の時に家族との経験をもとにして、この世界は良いものだ、信頼に値するものだ、という感覚を得るのです。家族を信頼すれば、自分の属するグループ（学校であれ、地域社会であれ、国家であれ）に帰属したいという意識が生まれるのです。価値観も共有できます。自分の属している社会に帰属するためには、社会人になるためのルールの順守とか、知識の取得（例 憧れのお医者さんになるために）をしなければならず、強いモチベーションを持つのです。小学校以降の「勤勉性」の発達課題のクリアにも影響があります。社会に帰属するための勤勉性ですから。
- 何らかの理由で、「基本的信頼関係」を築けなかった場合は、将来、反社会的行為に走ることが多いのです。反社会的なグループに属して、そのグループの反社会的価値観を遵守するのです。例えば暴走族とか非行グループとか場合によってはカルト宗教などです。オウム真理教の場合も、信者は家族に対しての憎悪の感情が激しかったようです。家族を始め、自分が今まで所属していた社会を受け入れず、反社会的グループに帰属するのです。人生のスタートの初めの2年間のケアの差が、大きな違いを生み出すのです。
- 多くの研究によっても、乳幼児期に見捨てられ不安等による「抑鬱感」を蓄積した場合は、境界性人格障害になる確率が高いといわれています。（ジェームス マスターソン）

上記が、エリクソンの教える、乳児の時期の発達課題「基本的信頼関係」の構築なしに、幼児期における発達課題の「自律」がクリアできない理由だと思います。人生の始め、0歳

から3歳までの気遣いが、子どもの健全な発達のベースを造り、「楽で楽しい子育て」ができる条件となるのです。

ICEの教育では、各コースの指導内容の中に、脳科学等の新しい発見を取り入れています。例えば、モンテッソリーコースのベビークラスでは「失われた基本的信頼関係の再構築」のために開発された「セラプレイ」の要素を入れています。

注目すべきは、構築に失敗した「基本的信頼関係」も、小学生になっても、適切な指導によって改善できることも分かってきました。それをICEの指導の中でどの様に活かしていくのか研究中です。

今回はアンリ ワロンの「共感的」な感情の育成について考察したいと思います。共感することは、社会性を育てる上での必要条件です。

以上